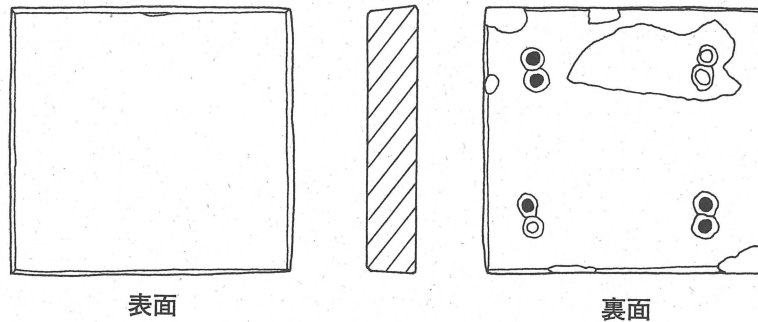


国見町文化財調査報告書(概報) 第4集

十^{じゅう}園^{ぞの}遺跡

—国見町^{たいら}多比良地区町営圃場整備事業に伴う発掘調査概報—



石 帯 (2/3 本文59頁)

2004

長崎県国見町教育委員会

の4つのパターンを考えた。

- ① 火山灰が遺構検出面上層に堆積し、それ以前のおとし穴状遺構と時期設定できるもの。
- ② 時期設定可能な遺物を包含する包含層が遺構検出面上層に堆積し、その包含層の時期以前のおとし穴状遺構と時期設定できるもの。
- ③ 時期設定可能な遺物を包含する遺物包含層を掘り込んで遺構が検出され、その包含層の時期以降のおとし穴状遺構と時期設定できるもの。
- ④ 遺物の出土や火山灰層及び遺物包含層との関連も無く、周りの状況のみでしか時期設定できないもの。

以上を検討の結果、第11表のとおりである。やはり細かい時期設定は難しい。かろうじて、魚洗川B遺跡・百花台D遺跡・十園遺跡の資料が上限と下限が押さえられる程度である。また、今回の集成作業では住居跡などの遺構との切り合い関係が皆無であり、よりいっそう時期設定が困難な作業となっている。今後の調査では、他の遺構との切り合い関係や火山灰層及び遺物包含層との関係をさらに意識的に確認していかなければならない。

さらに、池田朋生氏が述べる(2004九州縄文)ように堆積した土層が一次堆積か二次堆積かの見極めも大きなポイントとなる。また、高橋信武氏の指摘(2004九州縄文)のとおり、おとし穴状遺構内の土層堆積の掲載は言うまでもなく、遺構の掘り込まれた部分の土層堆積も同様に掲載することでより多くの比較検討が可能となる。今概報では土層の明示が満足にできていないことをお詫びしたい。

また、なにもおとし穴状遺構の時期決定については、出土遺物や土層堆積ばかりがその全てではない。牛込A・B遺跡のように「居住の場」と「狩猟の場」が想定される場合にはかなり狭い範囲での時期想定が可能と考えられる。ただ、この際物的証拠にかける場合があり慎重な判断が必要だが、遺跡をトータル的に捉えることによって可能な作業であろう。そのためには、これまでのような遺物の集中して出土する地区ばかりではなく、「狩猟の場」を狙った調査(人々の生活空間全体の調査)を行うことが必要であり、今後の調査における大きな反省材料である。

(おとし穴状遺構の形態的特長)

おとし穴状遺構の形態については次の5つが見られる。

- ① 平面形が隅丸長方形で底面に小ピットを有するもの(魚洗川B、鷹野、魚洗川A、十園)。
- ② 平面形が円形で底面にピットを1つ有するもの(牟田の原、牛込A・B)。
- ③ 平面形が楕円形に近い不定形で袋状土坑状の断面形態を有し、底面に不規則に小ピットを有するもの(百花台D、柿泊)。
- ④ 楕円形で底面に礫を配すピットを2つ有するもの(小中野A)。
- ⑤ 平面形が円形や楕円形で底面にピットを有しないもの(鷹野、百花台B、C、D、十園)

以上のようになる。また、底面にピットを有するおとし穴状遺構は、そのピットの大きさが2つのタイプに分かれる。1つ目は牟田の原、牛込A・B、小中野Aのように、中央付近に径の大きな1~2個のピットを持つもの。ピット上面や内部には礫を伴うものがおおい。もう1つは魚洗川B、百花台D、魚洗川A、柿泊、十園のように径の小さいピットを多数有するもの。さらに、この径の小さなピットを有するおとし穴状遺構は、魚洗川B、魚洗川A、十園のように比較的整然とピットが配置されるものと、百花台D、柿泊のおとし穴状遺構のように不規則な配置のものに分けられる。このような形態の差が時期の差かどうかは今村啓爾氏の指摘(今村1994)もあり慎重を期さねばならない。

今概報p26の1号おとし穴状遺構については、遺構検出時に底面に穿たれた小ピットのものと考えられる色調の違うピットが検出されている。ただし、それらは底面のピットの直上では検出されていない。2004九州縄文における資料集成の中には、最初から底面の逆茂木が斜めに設定されているものもあり、十園遺跡のものも真っ直ぐな逆茂木ではなく曲がったものを使用していたとすれば、それらと同様の効果を狙ったものとも考えられる。逆茂木の大きさや数の違いは、時期の差による場合もあるだろうが、もっぱら対象動物の獲得方法の違い、または狩猟対象動物そのものの違いと考えられる。いずれにしても資料数の少ない本県では、資料の蓄積を待つて再度検討する必要がある。

(内部の土層堆積状況について)

おとし穴状遺構内部の土層堆積について見てみたい。県内の資料では6遺跡7基に実測図の記載が

あるが、詳細が不明なものも多い。いくつかパターンを考えてみたい。

- ① 底部に薄く黒色の粘質土が堆積しその上に1層あるいは2層の比較的厚い堆積層が見られるもの。(魚洗川B, 百花台D, 十園)
- ② 比較的水平的な数層の堆積が見られるもの。(柿泊, 魚洗川A)
- ③ 薄い堆積層が多数(ランダムに)見られるもの。(百花台D)

以上のようになる。2004九州縄文において提示された他県のおとし穴状遺構の土層堆積についても、上記の3パターンに当てはまるものが見られる。また、それ以外に、④土層断面がU字状になり「まさしく自然堆積」の状況を示すものも多く見られる。よって、おとし穴状遺構の内部の土層堆積については上記の4パターンを考えてみたい。通常土坑などのいわゆる「穴」が埋没する際は火山活動などによる一気の埋没を除けばパターン④のようになると考えられる。したがって、パターン①～③については人為的な埋め戻しの可能性も考えられよう。また、鷹野や魚洗川Aのような内部に礫や炭化物が入っているものは、大雨などにより運ばれたものとも考えられなくはないが、水流による土砂の運搬には何らかの痕跡が残るはずで、これも人為的な埋め戻しと考えられよう。

おとし穴状遺構を埋め戻す理由については、狩猟の際、使用しなくなったおとし穴状遺構に転落する危険性の回避や、後世の集団による住居地等への転換に伴う造成作業等が考えられる。狩猟の場として継続して使用する場合の危険性を考えての埋め戻しであれば、時期決定可能な遺物が混入することは少ないであろうが、後世の集団による造成作業等による埋め戻しに伴う埋め戻しであれば、少なくともおとし穴状遺構の埋没時期が判明する可能性はあろう。①～③のパターンの全てが人為的なものと判断するつもりはないが、内部の土層が人為的なものか否かを判断することは、おとし穴状遺構の下限の時期設定に大きくかわるものである。2004九州縄文において多くの発表者が指摘するように、より細やかな土層観察が重要となる。また、おとし穴状遺構の埋没速度について、「放棄後数年で大部分が埋まってしまう」との指摘(今村1994)もあるが、第2次大戦時日本軍の掘った塹壕や個人用防空壕(タコソボ)は、戦火の厳しかった中国南部などにはいまだに開口している。地域や地形によっても埋没速度が大きく変動することも頭に入れておかねばならない。

(おわりに)

上記のとおり、県内の事例と2004九州縄文において検討されたことを対比して見てきたが、基本的に忠実な調査方法がおとし穴状遺構の調査においては最も必要なことであると考えられる。遺跡全体の土層の把握、正確な遺構の検出、内部の土層の見極め、など、いずれも発掘調査を行うにあたって最も基本的な事項であり、最も大切な作業である。底面に残された逆茂木等の痕跡についても宮田栄二氏の提唱するスライス調査によってその大半が調査可能とされる。また、宮田氏は底面のみならず壁面に残された痕跡についても今後調査の必要性を指摘している。

今概報において報告した5基のおとし穴状遺構(十園・小中野A)については、内部の土層の観察など基本的な事柄について不十分な点が多くある。2004九州縄文の会場において自らの不勉強と未熟な調査方法を思い知らされた。今後の調査の反省材料としたい。

おとし穴状遺構の総括的な研究は佐藤宏之氏(佐藤2000ほか)をはじめ多くの研究者により検討されている。県内の状況は資料数の制限もあり多くを語れない状況だが、今後調査事例の増加を待って、地形的制約の多い長崎県のおとし穴状遺構の特徴について検討していきたい。(辻田)

第11表 長崎県検出のおとし穴状遺構時期想定一覧

| 番号 | 遺跡名 | 時期判定の要素 | 時期 |
|----|-----------|---|---------------------------|
| 1 | 牟田ノ原 | | 旧石器以降（早期？） |
| 2 | 魚洗川 B | Ⅳ層（礫石原火砕流）上面が検出面 | 細石器以降縄文早期後半以前 |
| 3 | 百花台 D | Ⅲ層（細石器及び早期物混在）下面が検出面 | 細石器以降縄文早期後半以前 |
| 4 | 牛込 A・B | 条痕文土器と平椀式土器はおとし穴状遺構と分布が重なり、押型文土器の分布は重ならない | 条痕文土器及び平椀式土器以外の時期（押型文土器か） |
| 5 | 鷹野 | Ⅱ層（押型文土器・無文土器）中からの掘り込み | 押型文土器・無文土器以降 |
| 6 | 魚洗川 A | Ⅲ層（塞ノ神式土器）下面が検出面 | 塞ノ神式土器以降 |
| 7 | 柿泊 | アカホヤ火山灰堆積層より下層で検出 | アカホヤ火山灰堆積以前 |
| 8 | 百花台 B・C・D | | 早期？ |
| 9 | 十園 | 内部にアカホヤ火山灰（分析は行っていない） | アカホヤ以降弥生時代以前 |
| 10 | 小中野 A | 十園遺跡と覆土が類似 | 同上？ |

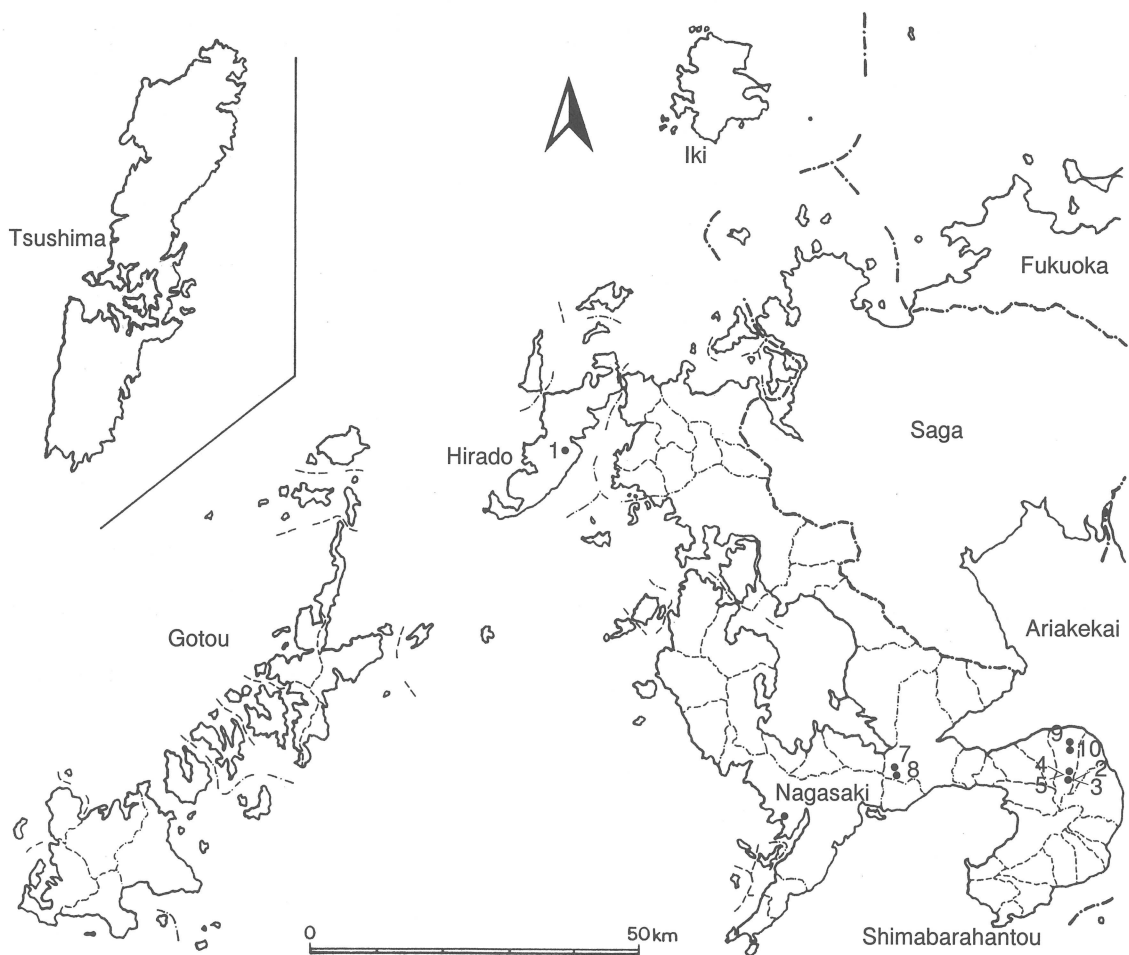
註1 文献2, 3, 6

参考文献

- 鈴木忠司1996「第4節 岩宿時代の陥穴状土坑」『下原遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査研究報告 第72集
- 辻本崇夫1996「第5節 岩宿時代以降の陥し穴の変遷とその背景」『下原遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査研究報告 第72集
- 鈴木忠司1996「第6節 岩宿時代の陥穴状土坑をめぐる二三の問題」『下原遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査研究報告 第72集
- 今村啓爾1994「陥穴（おとし穴）」『縄文時代の研究』2生業 雄山閣出版株式会社
- 第14回 九州縄文研究会2004『九州における縄文時代のおとし穴状遺構』九州縄文研究会・南九州縄文研究会
- 月刊 考古学ジャーナルNo468 2001『旧石器から縄文時代の狩猟』ニューサイエンス社
- 佐藤宏之2000『北方狩猟民の民族考古学』北方新書004 北海道出版企画センター
- 大林太良編1987『山人の生業』日本の古代10 中央公論社
- 月刊 考古学ジャーナルNo256 1985『縄文時代の生業』ニューサイエンス社

（長崎県内おとし穴状遺構検出遺跡報告書一覧）

- 1 萩原博文1995「第2章 平戸の旧石器時代」『平戸市史 自然・考古学』平戸市
- 2 副島和明・伴 耕一郎1989『魚洗川 B 遺跡』長崎県文化財調査報告書 第95集 長崎県教育委員会
- 3 田川 肇・副島和明・伴 耕一郎1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第92集 長崎県教育委員会
- 4 竹内 弘1982『九州横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第56集 長崎県教育委員会
- 5 副島和明・伴 耕一郎1986『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 Ⅲ』長崎県文化財調査報告書 第85集 長崎県教育委員会
- 6 田川 肇編1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第116集 長崎県教育委員会
- 7 宮下雅史・高田美由紀1997『柿泊遺跡』長崎市総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 長崎市教育委員会

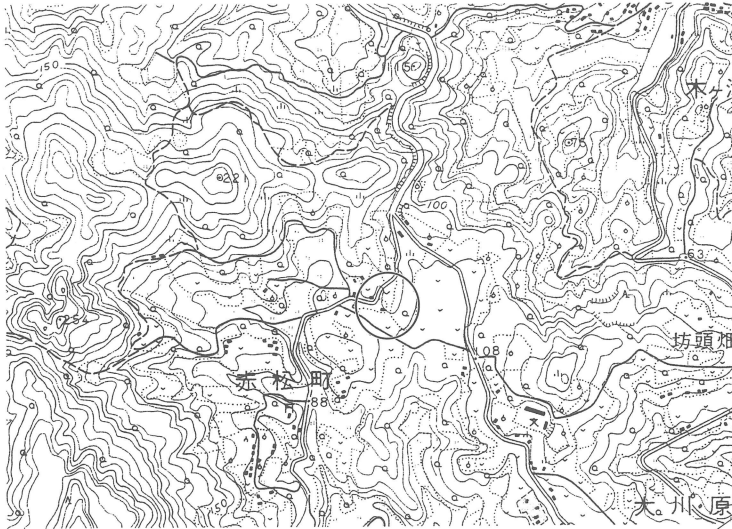


第55図 長崎県内おとし穴状遺構検出遺跡位置図

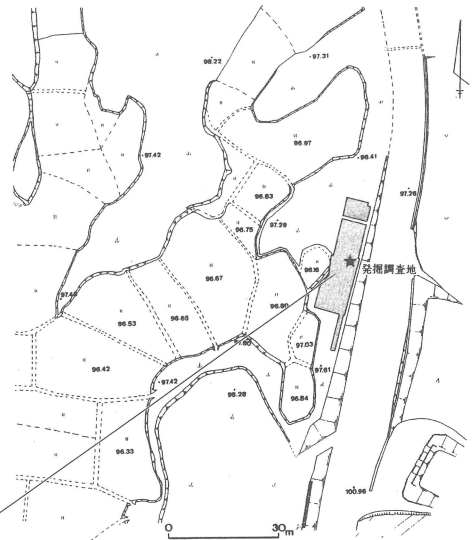
長崎県内おとし穴状遺構検出遺跡地名表

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時期 | おとし穴状遺構(基) | 備考 | 文献 |
|----|-----------|----------------|-----|------------|-----|----|
| 1 | 牟田ノ原 | 平戸市赤松町牟田・春 | 旧石器 | 1 | | 1 |
| 2 | 魚洗川 B | 南高来郡国見町金山名字横道上 | 早期 | 1 | | 2 |
| 3 | 百花台 D | 南高来郡国見町金山名字堀囲 | 早期 | 1 | | 3 |
| 4 | 牛込 A・B | 諫早市貝津町牛込 | 早期 | 9 | | 4 |
| 5 | 鷹野 | 諫早市津久葉町 | 早期 | 5 | | 5 |
| 6 | 魚洗川 A | 南高来郡国見町金山名字横道上 | 早期 | 1 | | 6 |
| 7 | 柿泊 | 長崎市柿泊町 | 早期 | 1 | | 7 |
| 8 | 百花台 B・C・D | 南高来郡国見町金山名字堀囲 | 早期 | 2 | | 6 |
| 9 | 十園 | 南高来郡国見町馬場名字十園 | 早期 | 3 | 今概報 | |
| 10 | 小中野 A | 南高来郡国見町多比良字小中野 | 早期? | 2 | 今概報 | |

時期は各報告書の想定時期

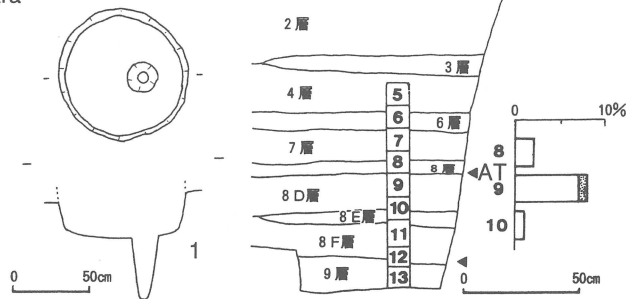


第56図 牟田の原遺跡位置図(1/25,000)

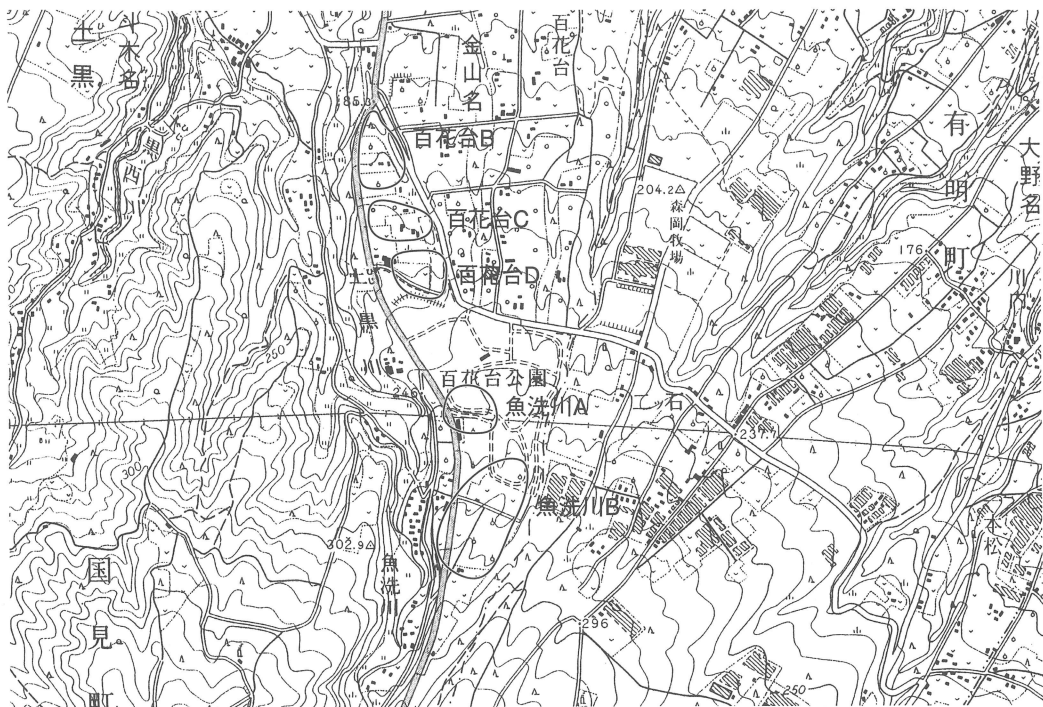


第57図 牟田ノ原遺跡調査区位置図及びおとし穴状遺構検出地点(1/2,000)

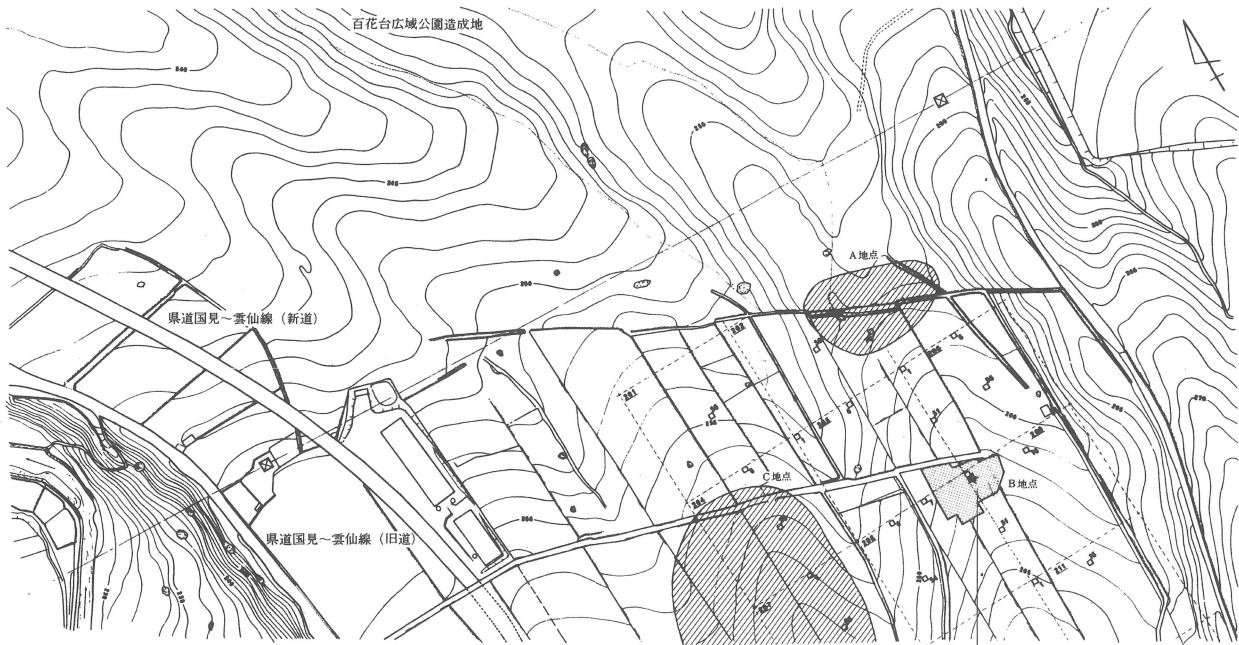
1. Mutanohara



第58図 牟田ノ原遺跡おとし穴状遺構(1/50), E区東壁土層断面図及び火山ガラス比

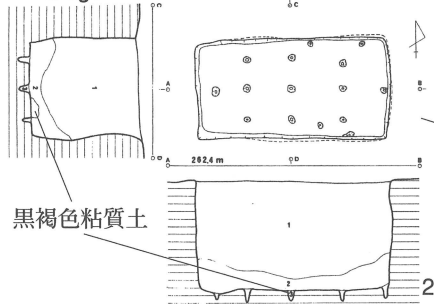


第59図 魚洗川 A 遺跡・魚洗川 B 遺跡・百花台 B 遺跡・百花台 C 遺跡・百花台 D 遺跡位置図(1/25,000)

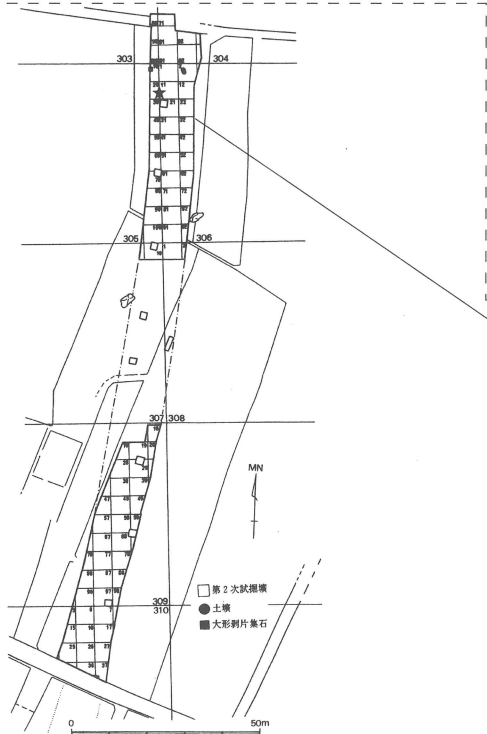


第60図 魚洗川 B 遺跡調査区位置図(1/600)

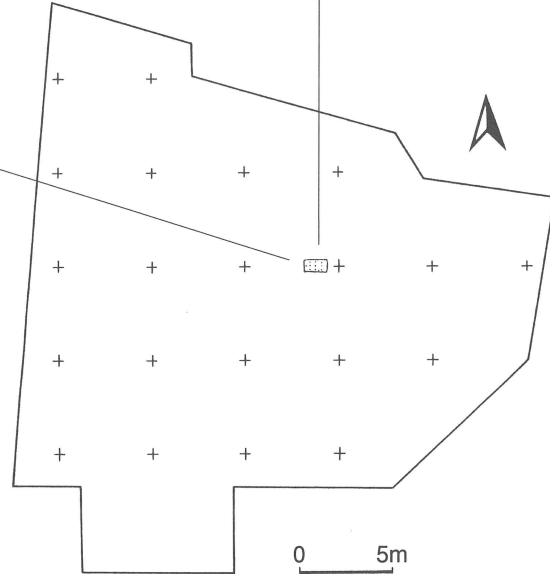
2. Iwarego B



第62図 魚洗川 B 遺跡おとし穴状遺構(1/50)

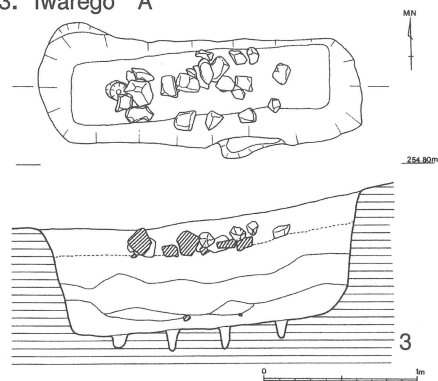


第63図 魚洗川 A 遺跡調査区位置図及びおとし穴状遺構検出地点(1/200)

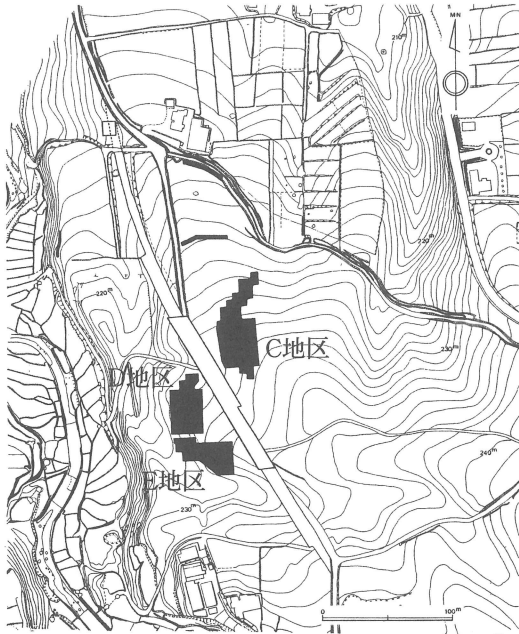


第61図 魚洗川 B 遺跡おとし穴状遺構検出地点(1/200)

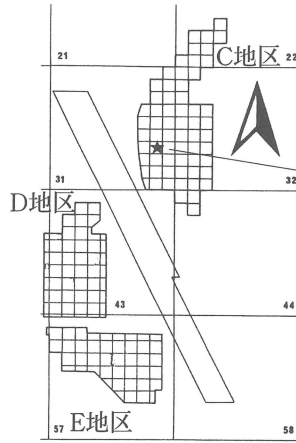
3. Iwarego A



第64図 魚洗川 A 遺跡おとし穴状遺構(1/50)

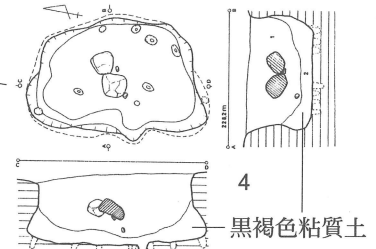


第65図 百花台 D 遺跡調査区位置図(1/6,000)

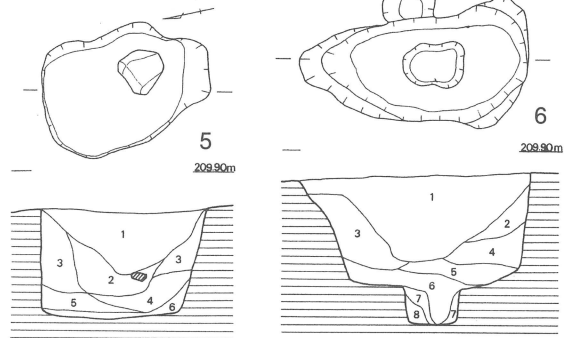


第66図 百花台 D 遺跡おとし穴状遺構検出地点(1/3,000)

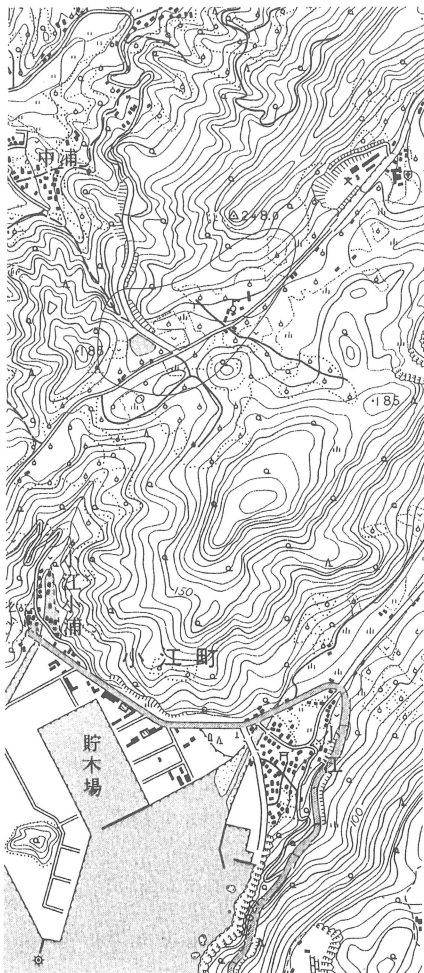
第67図 百花台 D 遺跡おとし穴状遺構(1/50)



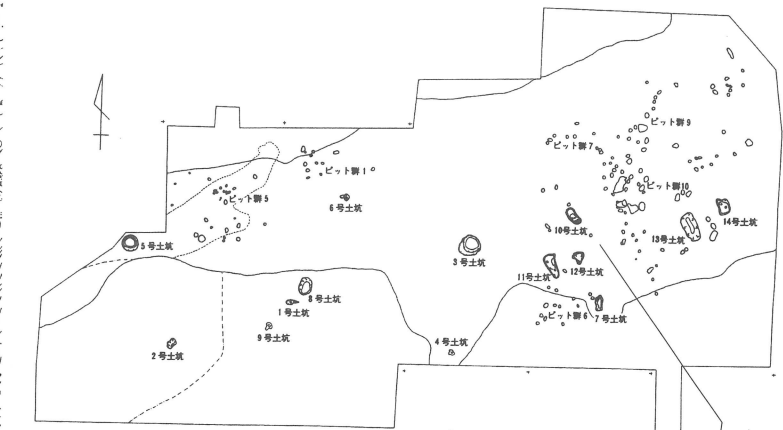
5. Hyakkadai B, C, D



第68図 百花台 B, C, D 遺跡おとし穴状遺構(1/50)

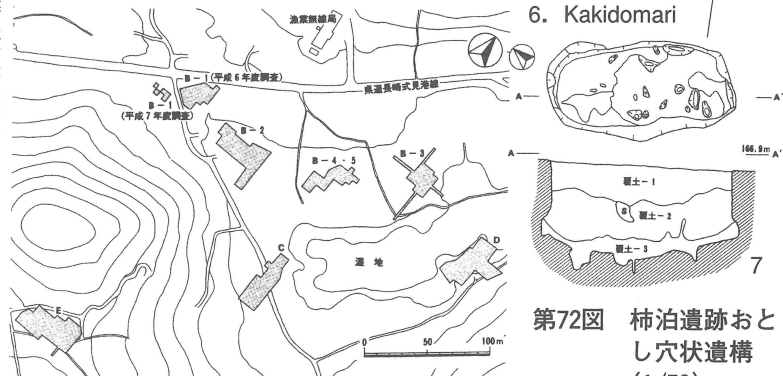


第69図 柿泊遺跡位置図(1/25,000)



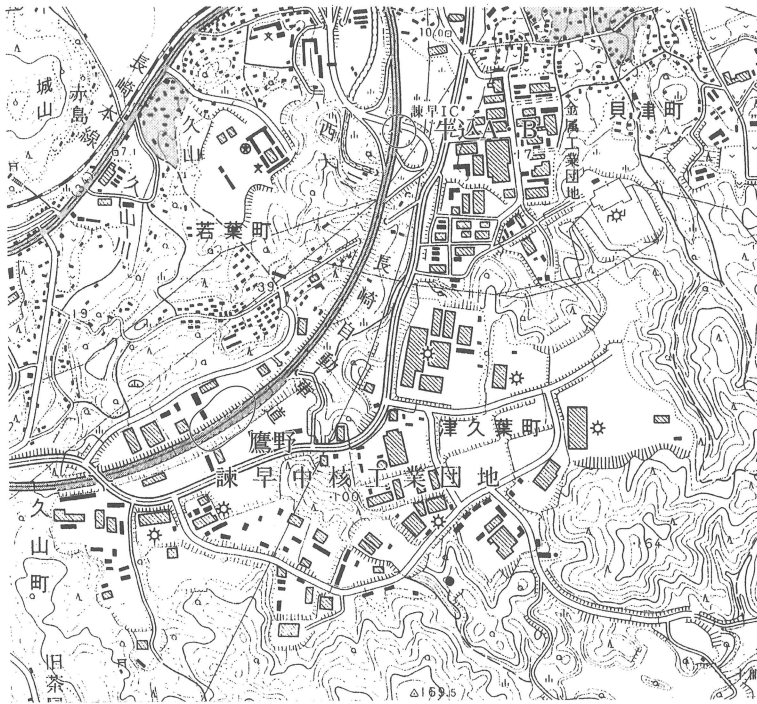
第70図 柿泊遺跡おとし穴状遺構検出地点(1/400)

6. Kakidomari

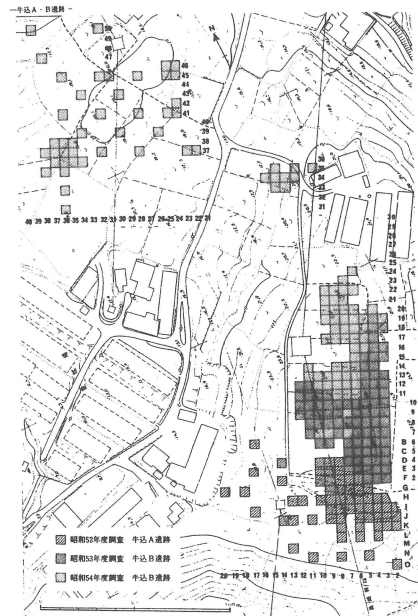


第72図 柿泊遺跡おとし穴状遺構(1/50)

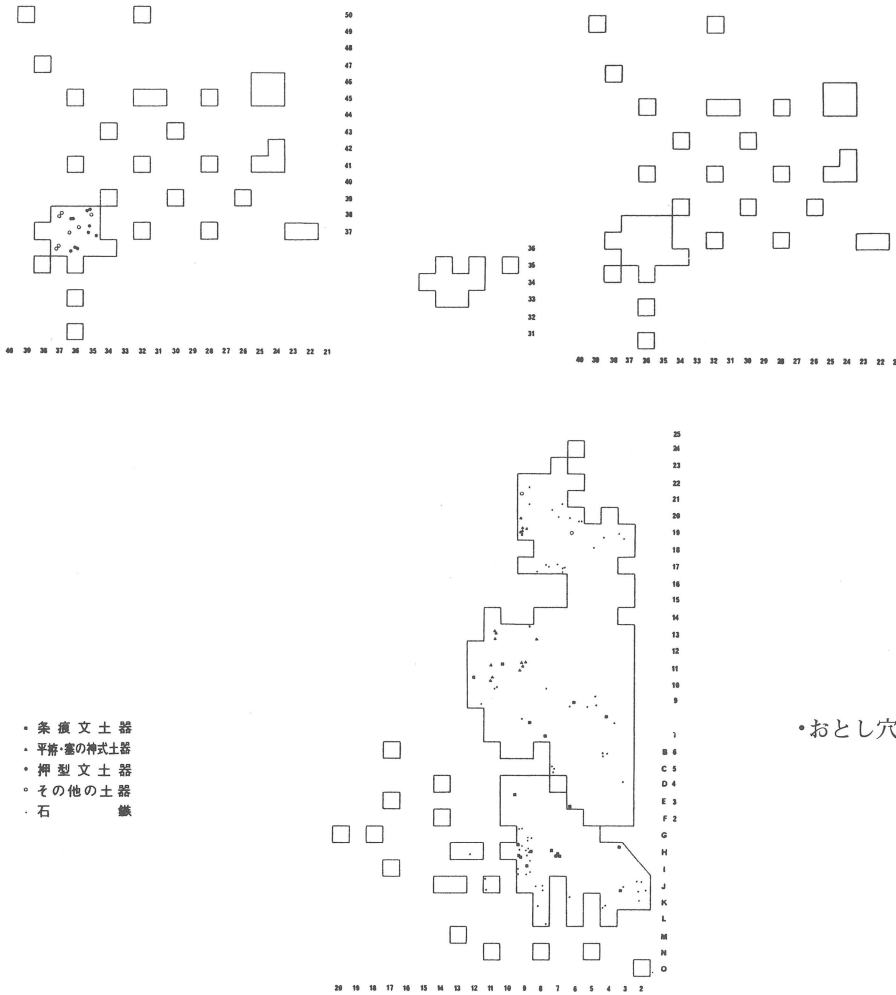
第71図 柿泊遺跡調査区位置図(1/6,000)



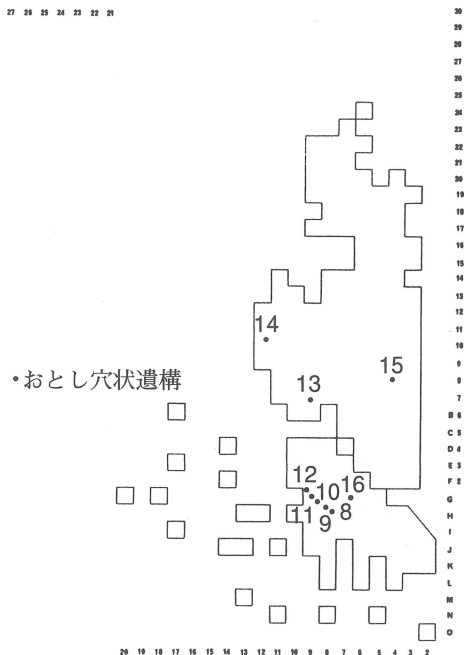
第73図 牛込A・B遺跡・鷹野遺跡位置図(1/25,000)



第74図 牛込A・B遺跡調査区位置図(1/4,000)

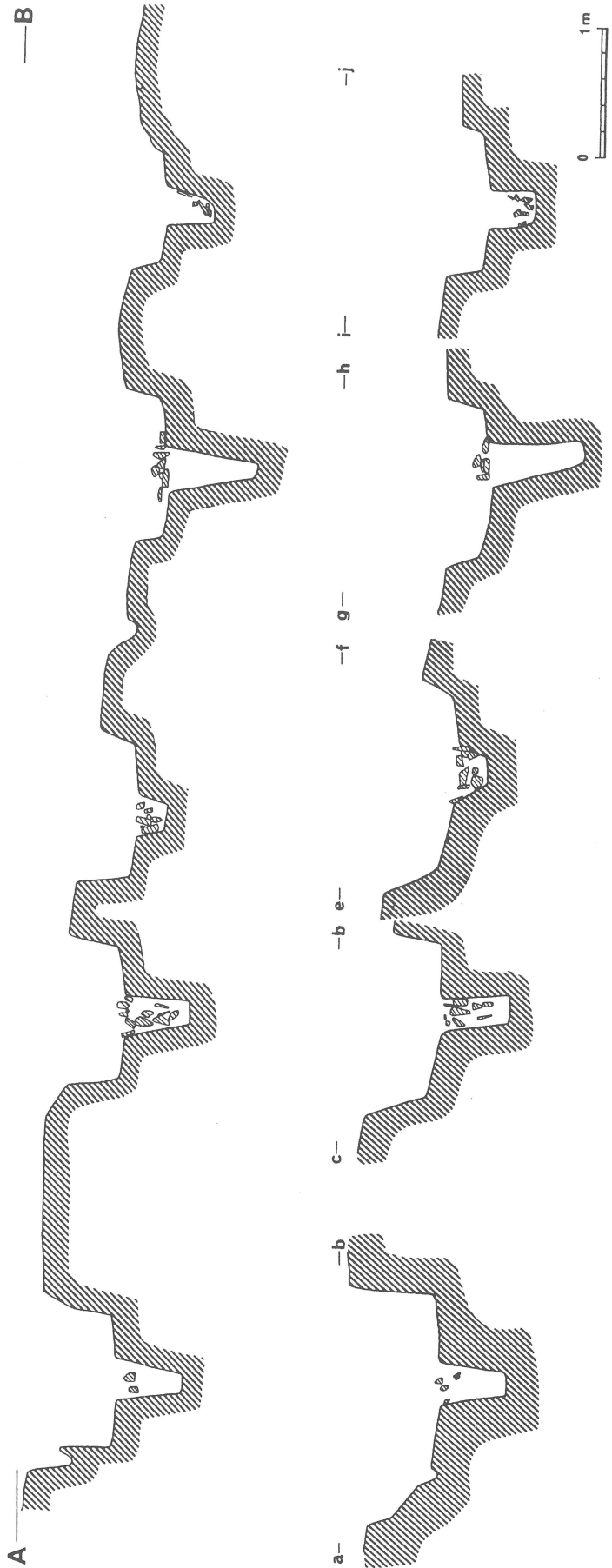
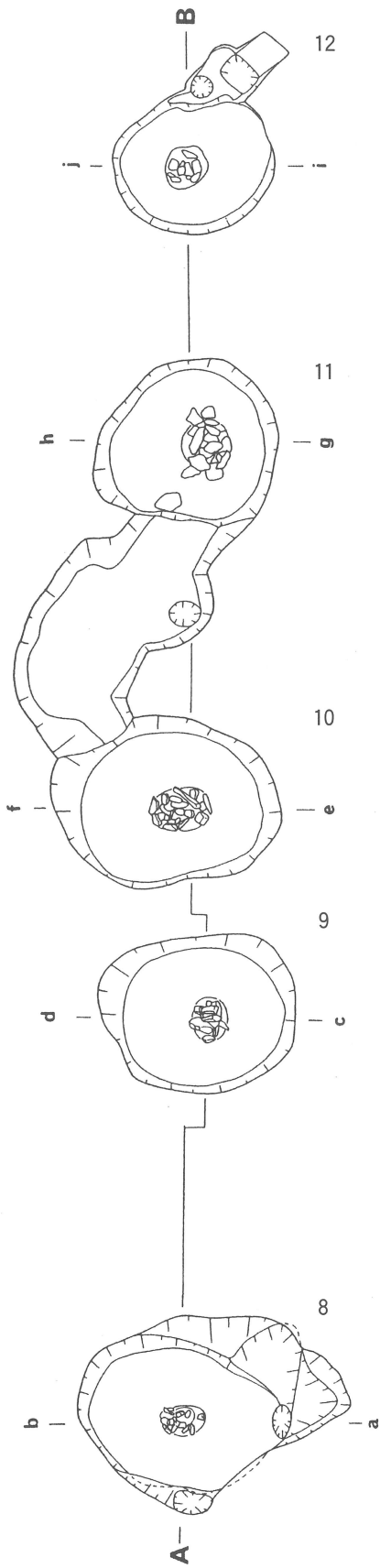


第75図 牛込A・B遺跡早期遺物分布図(1/1,500)



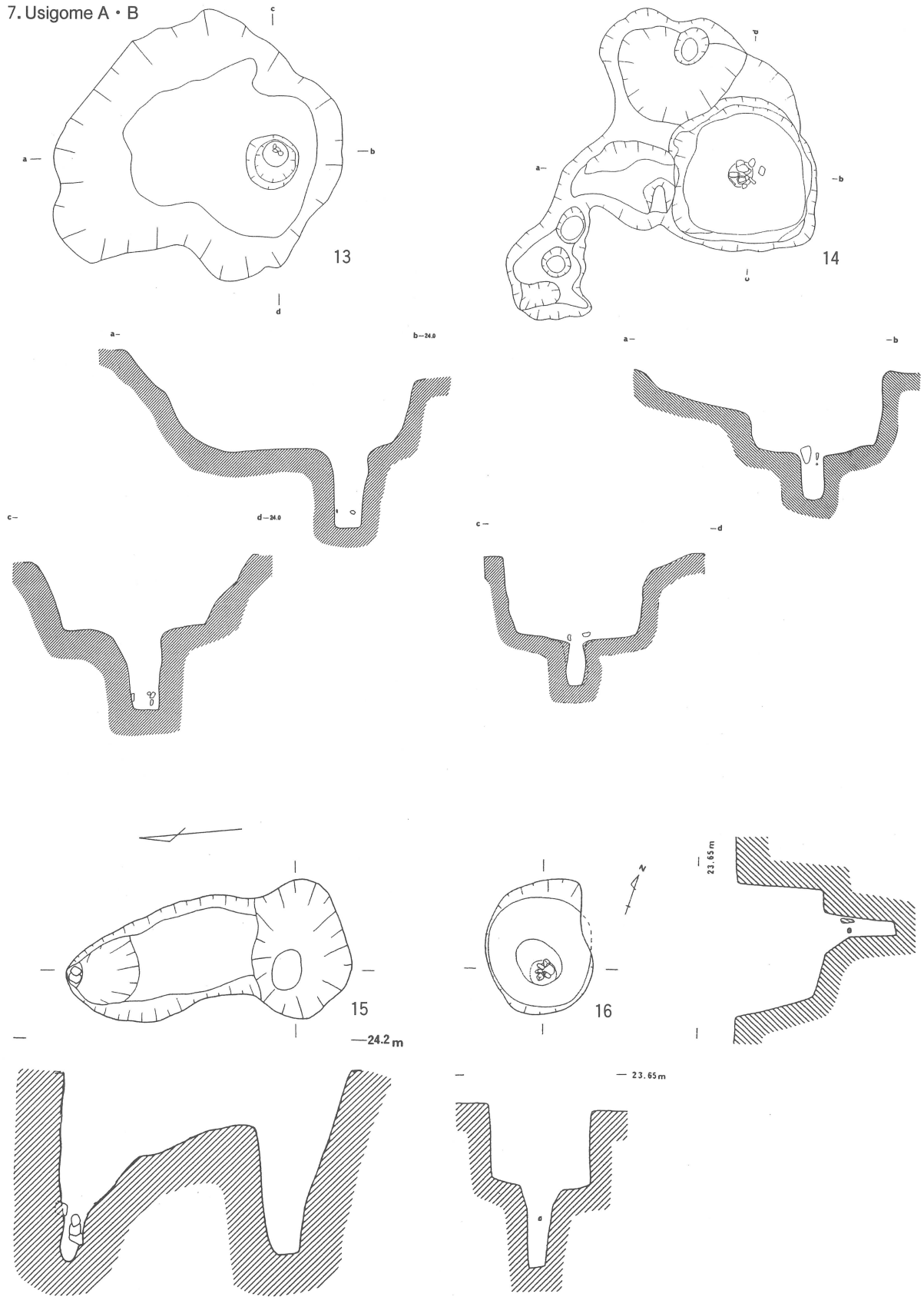
第76図 牛込A・B遺跡おとし穴状遺構検出地点(1/1,500)

7. Usigome A・B

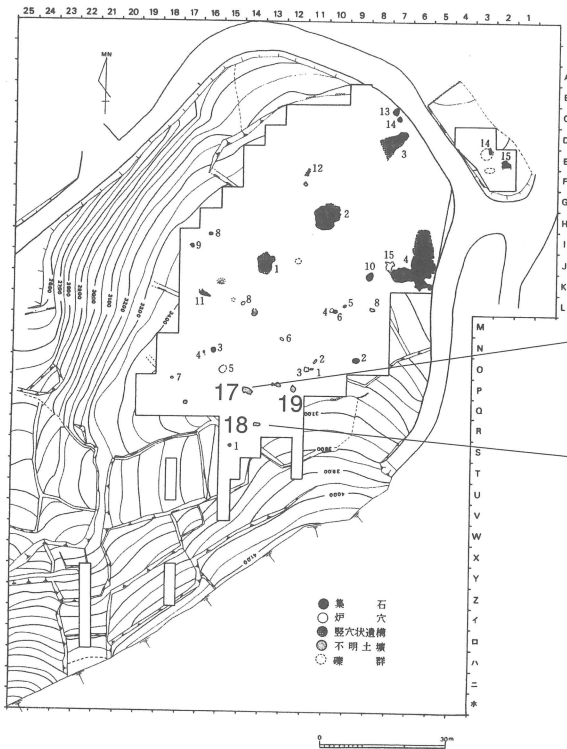


第77図 牛込 A・B 遺跡おとし穴状遺構(1/50)

7. Usigome A・B

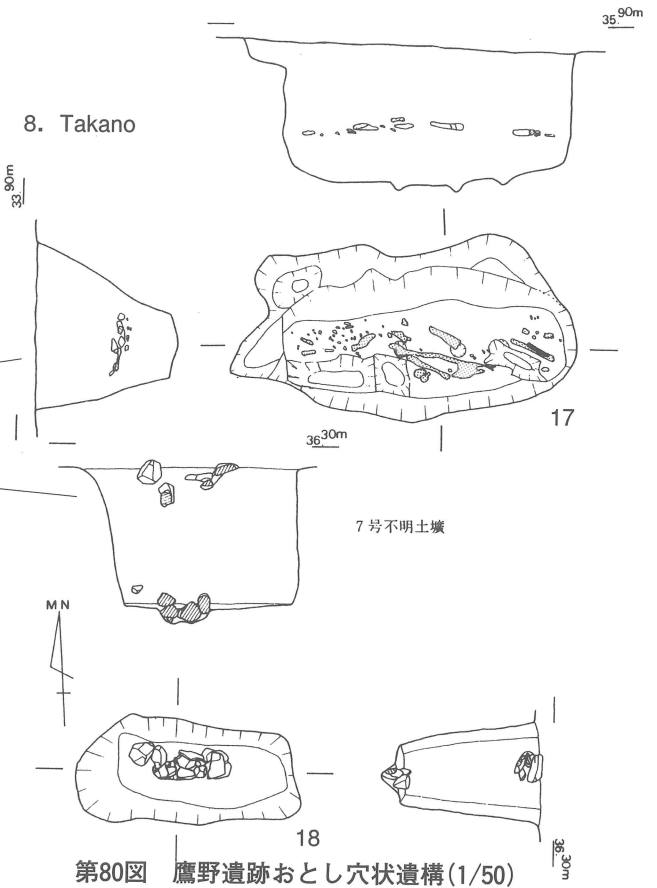


第78図 牛込 A・B 遺跡おとし穴状遺構(1/50)

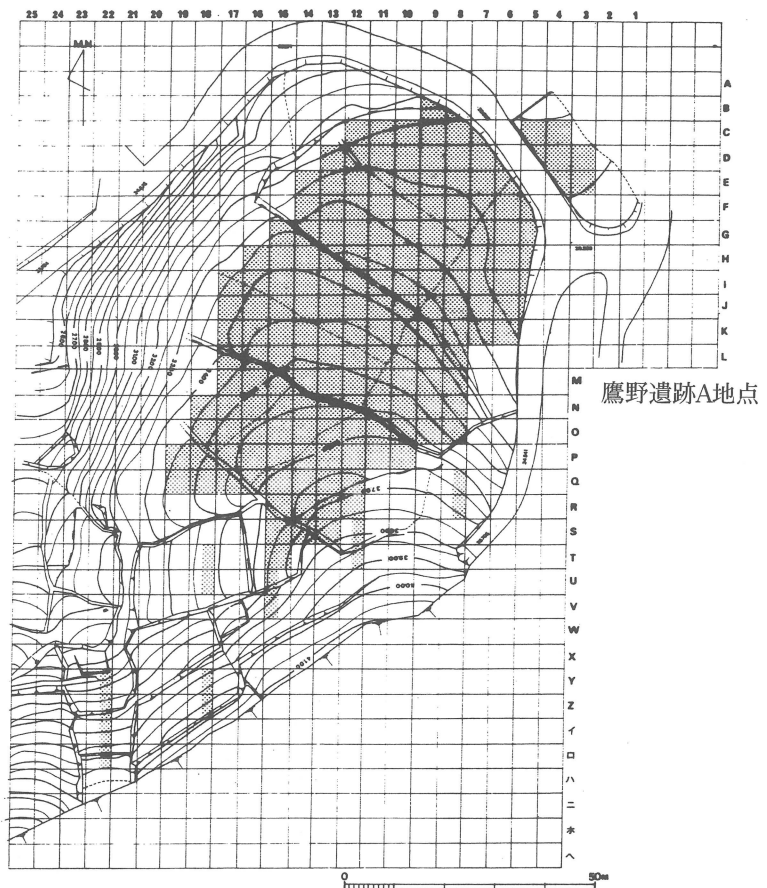
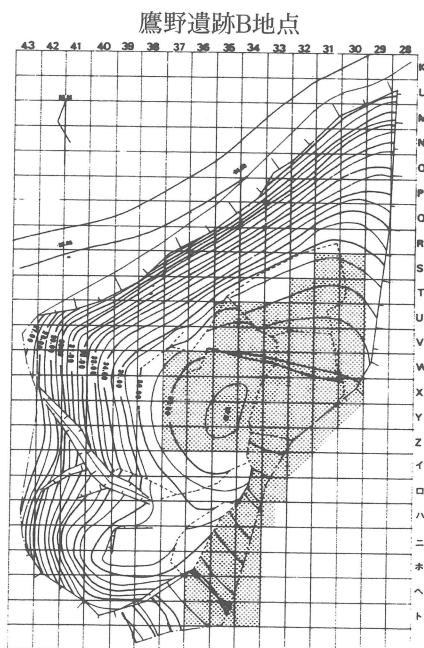


第79図 鷹野遺跡A地点調査区位置図(1/1,800)

8. Takano

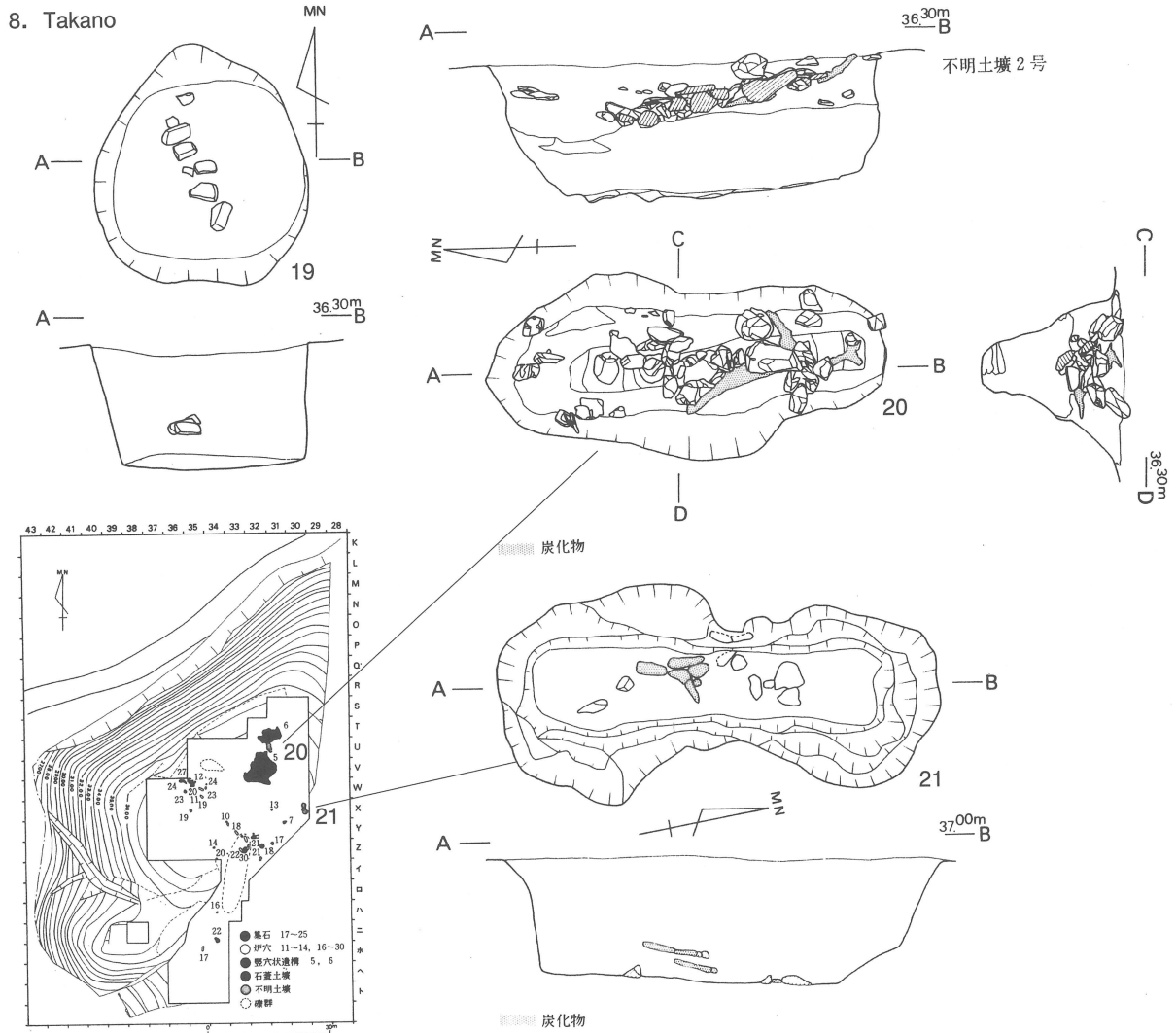


第80図 鷹野遺跡おとし穴状遺構(1/50)



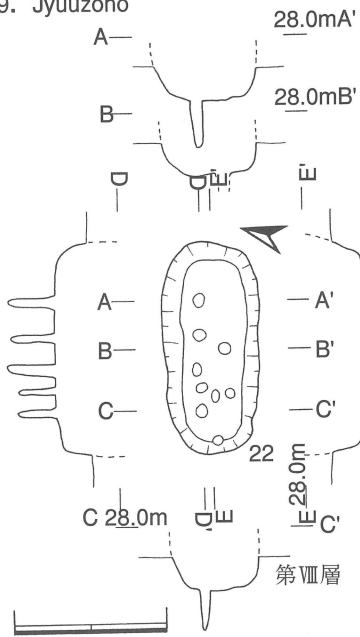
第81図 鷹野遺跡調査区位置図及び地形図(1/1,500)

8. Takano



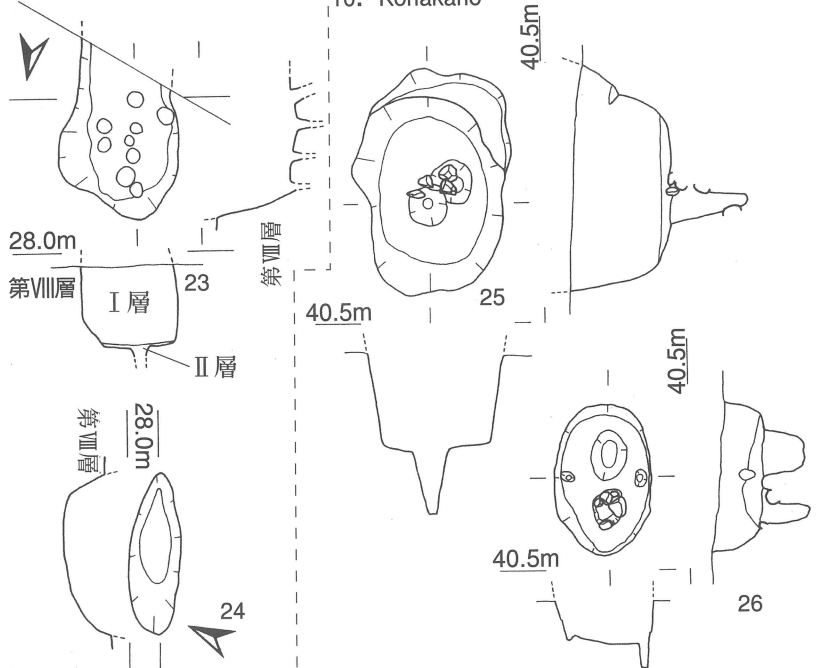
第82図 鷹野遺跡 B 地点調査区位置図 (1/1,800) 第83図 鷹野遺跡おとし穴状遺構 (1/50)

9. Jyuuzono



第84図 十園遺跡おとし穴状遺構 (1/50)

10. Konakano



第85図 小中野 A 遺跡おとし穴状遺構 (1/50)

第2節 土師器の分析

1) 土器群の組成 (12~14区 SD01出土土器)

十園遺跡12~14区直線的に延びる一本の溝(第30図)が検出されている。溝の覆土は均一な砂質土で、内部には奈良時代から平安時代にかけての土器片(第31~44図)と石帯(巡方)(第45図)1点を含んでいた。検出長約45mのこの溝からは、下に示すように大量の土器片が出土している。

| | | |
|-----|---|---------------------------------------|
| 土師器 | — | 供膳具類(坏口縁部片および底部片264点, 蓋片9点, 高台坏片21点) |
| | | 煮沸具類(甕口縁部片118点, 竈片7点, 甑把手3点) |
| 土師器 | — | 供膳具類(坏口縁部片および底部片121点, 蓋片12点, 高台坏片14点) |
| | | 貯蔵具類(甕口縁部片および胴部片323点, 壺片21点) |

この数字(註1)を利用して、遺物組成の分析を行っていき(註2)。島原半島の古代における遺物組成についての整理(註3)は稗田原遺跡で行われている。稗田原遺跡の分析の中で川口氏は大宰府史跡などと比べると煮沸具の割合の高さから、生産遺跡に近い遺物組成という興味深い整理をした。さて、十園遺跡の直線的な溝から出土した土器の遺物組成はどのような性格を示すのであろうか?

| | | | |
|-----------------|----------|----------|----------|
| 十園遺跡12~14区 SD01 | 煮沸具14.1% | 貯蔵具37.6% | 供膳具48.3% |
| 稗田原遺跡旧河川跡 | 煮沸具46.2% | 貯蔵具21.7% | 供膳具32.1% |

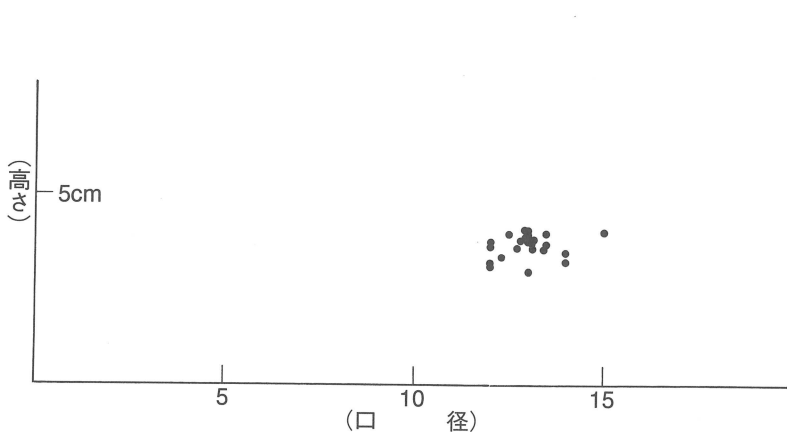
この2遺跡の比較では十園遺跡で検出された溝の出土遺物は煮沸具の割合が少なく、供膳具や貯蔵具の割合が高いことが指摘できる。さらに川口の挙げた他遺跡での分析成果と比較する。

| | | | |
|------------|----------|----------|----------|
| 串山ミルメ浦遺跡 | 煮沸具57.3% | 貯蔵具13.3% | 供膳具19.4% |
| 原の辻遺跡・大川地区 | 煮沸具4.2% | 貯蔵具15.7% | 供膳具80% |
| 大宰府史跡 | 煮沸具11.1% | 貯蔵具9.1% | 供膳具79.8% |

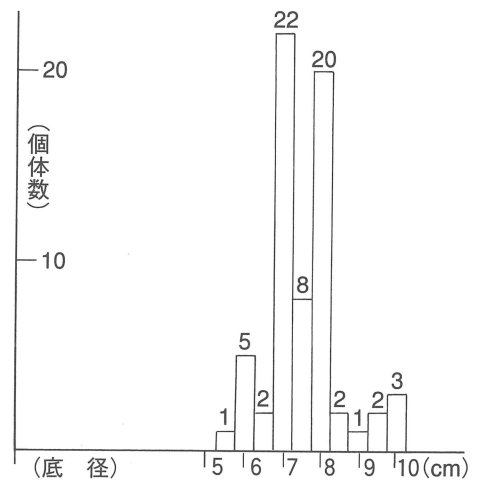
官衙的と考えられる原の辻遺跡・大川地区や大宰府史跡などでは、供膳具がいずれも70%を越えているのに対して十園遺跡の溝では50%に近い数字となる。十園遺跡の溝で検出された土器群には、煮沸具が少ないことと貯蔵具が多いことが指摘できる。この点は特徴的であり、十園遺跡には供膳具を頻りに利用したという性格の他に、貯蔵具を多く利用したという性格が期待できる。この分析から今回検出された規格性の高い建物群の他に、倉庫群などの貯蔵施設が存在したことが想定できる。

2) 土師器坏の分析

次に供膳具の一つである土師器坏を中心に分析し、島原半島での同時期の遺跡における調査成果との比較を行い、土師器坏の特徴を抽出していく。



第86図 十園遺跡12~14区 SD01出土土師器坏

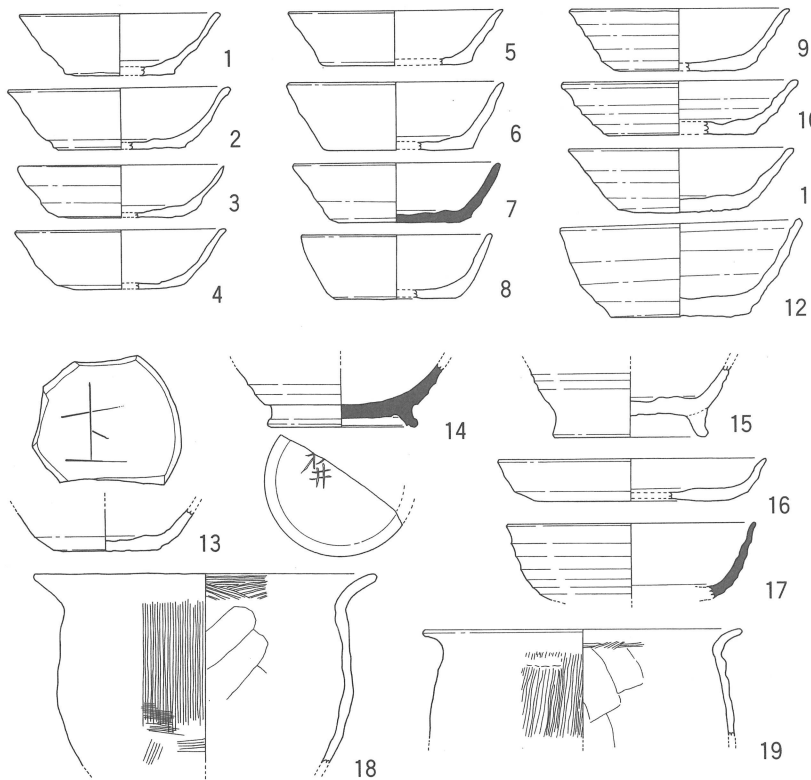


第87図 十園遺跡12~14区出土土師器坏底径

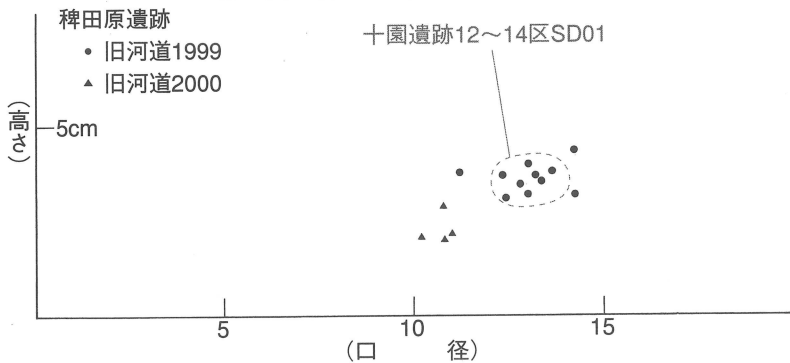
a) 十園遺跡12~14区 SD01 (第86・87図)

12~14区 SD01出土土師器坏の大きさは、高さは3.5~4.2cm、口縁部直径は12.5~13.5cm、底部直径は7~8cmの間に集中し、その振れは1cm未満となる。特に実測図で示した第31図1~3・6・8・9・10・12・14・15、第32図25・39、第33図40・43などについては共通した形態となる。底部直径は5.5cmから10cmまで幅広く分布しているが、7.0~8.0cmの間に75%が集中する。口縁部直径では12.5~13cmに66.7%が集中し、次に12cmに集中する。高さは3.0~4.2cmにあり、3.5~4.2cmに80%が集中する。第86図のように高密度に分布し、これらを「十園坏A類」と呼ぶ。

これらの分析から12~14区 SD01から検出された十園坏A類は、形態的に共通の強い規格を以って製作されたことが指摘できる。表面にみえる調整は溝出土品のため、摩滅が目立ち客観的なデータとならない。しかし、底部に確認できる仕上げ調整(底面の仕上げ調整)や内面の強いヨコナデ調整、そして体部下にはみえる粘土塊などの共通した痕跡が認められ、製作技法でも強い規格をもっていたことが指摘できる。同一集団によって製作されたものが十園遺跡に供給されていたのであろう。



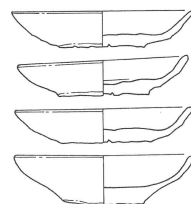
第88図 稗田原遺跡旧河道出土土器①(1/6)



第89図 稗田原遺跡出土土師器坏

b) 稗田原遺跡 (註4)

島原半島東岸にある島原市稗田原遺跡では古代の土石流により埋没した河川が検出されており、年度毎の調査により二種の土師器坏が出土している。第88図に示した土師器坏・甕と須恵器などは比較的まとめて出土している。第90図の坏4点は合わせ口の状態で添えられていたものが、若干流れた状態で検出されている。いずれも上流からの土石流による漂流物である。第88図の坏は高さ3.0~4.2cm口縁部直径12~14cmに集中し、十園遺跡12~14区 SD01出土品のような高密度の集中を示さない。外面調整は痕跡が残るほど強いヨコナデを施し、内面も凹凸の残るような強いヨコナデである。口縁部など端部の仕上がりも共通する。



底面はいずれもヘラ切り離しである。一括性の高い第90図の4点

第90図 稗田原遺跡出土土器②(1/6)

は高さ2.0から2.8cm口縁部直径10.2~11.0の間に集中している。調整・形態ともに共通しており、製作も同時期によるものであろう。小さな底部と内湾しながら立ち上がる丸みのある体部が特徴である。出土状態からも祭祀色の強い土師器杯である。

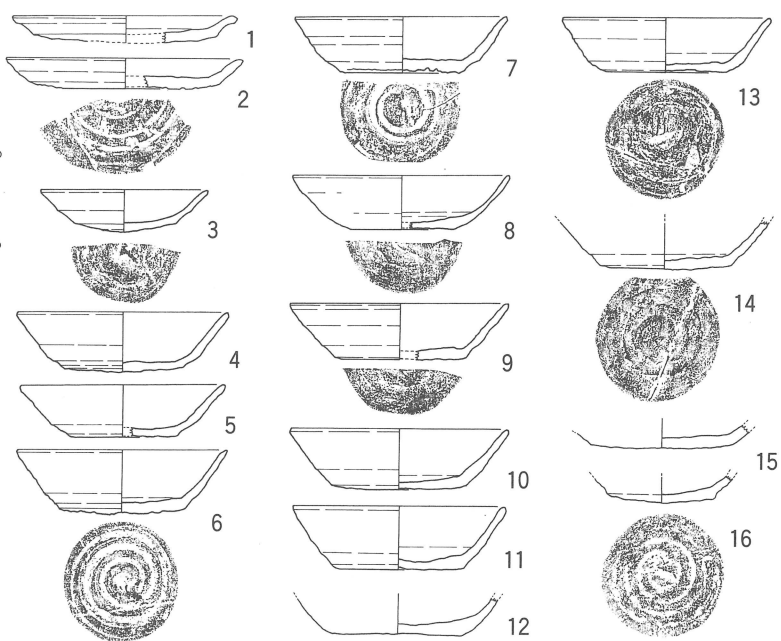
旧河川の土器群に対しては奈良時代（8世紀後半代）のものと報文の中で考えられている。

おおその
b) 大園遺跡 (註5)

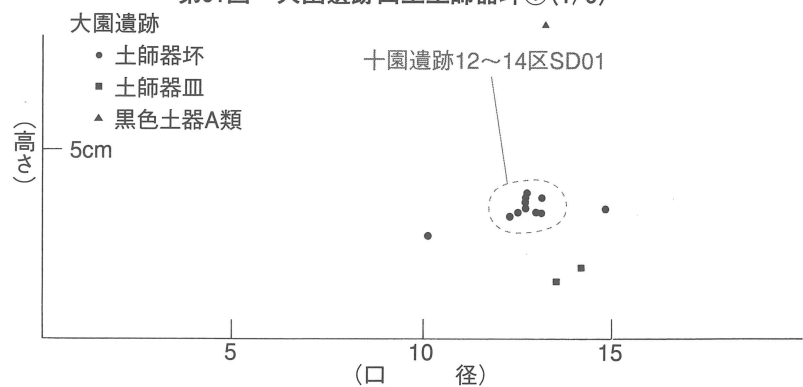
島原半島北西部にある吾妻町大園遺跡では層位ではあるが、比較的まとまった状態で須恵器・土師器が検出されている。写真図版や出土状態の実測図では何らかの遺構に関わるものと想定できるが、机上での再確認はできない。遺構一括という扱いはできないが、稗田原遺跡同様比較的まとまりのある一群としておく。杯は高さ3.0~4.2cm口縁部直径12.0~13.2cmの間にあり、高さ3.2~3.8cm口縁部直径12.3~13.1cmに集中している。

十園遺跡12~14区 SD01出土品と比べるとやや小ぶりの形態となる。調整や端部の仕上げなども共通している。皿についても調整や仕上げが杯とほぼ共通しており、同一の製作者集団の所産と考えたい。底部の仕上げが特徴的で、螺旋状の溝を残す回転ヘラ切り離しとなる。外面には下半部に回転利用のヘラ削り調整、体部はヨコナデ調整である。内面のヨコナデ調整は強く底には凹凸が確認できる。皿は高さ1.5~1.8cm口縁部13.5~14.2cmの間にあり、調整や胎土は杯とほぼ同じである。底部の仕上げも溝の残る回転利用のヘラ切り離しと削り調整である。十園遺跡47区 P123や P127出土の高盤片口縁部（第29図深さ1.5cm以上）や稗田原遺跡旧河川で検出されている皿（口縁部直径26.2cm高さ2.5センチ）などと比べると小ぶりで浅い器形となる。相伴遺物として第93図20に示した須恵器の高台杯がある。これは十園12~14区 SD01（第41図）や稗田原旧河川出土品（第88図14）と比べ、高台断面が方形で外側への張り出しもない。十園遺跡や稗田原遺跡例より若干新しくなるのであろう。

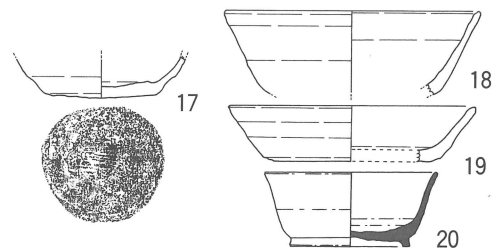
検出遺構にはほぼ同時期となる柱穴があるが、建物などは検出されていない。遺跡の性格の想定は難しいが、須恵器甕や土師器甕も多数出土しており、守山条里跡に隣接した集落となる可能性がある。



第91図 大園遺跡出土土師器杯①(1/6)



第92図 大園遺跡出土土師器杯

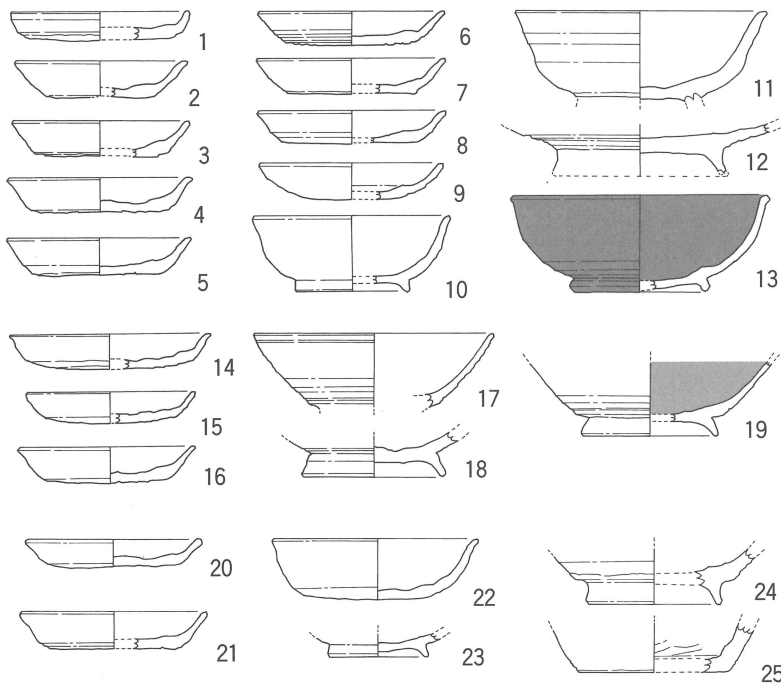


第93図 大園遺跡出土土師器杯②(1/6)

c) 筏遺跡 (註6)

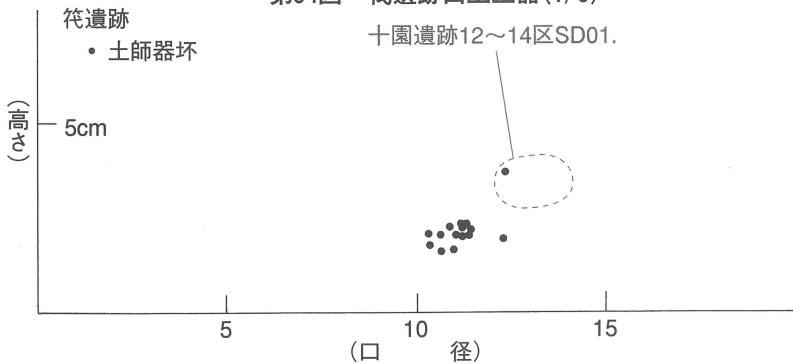
島原半島北岸に位置する国見町筏遺跡では、範囲確認調査により縄文時代と古代(平安時代)の遺物包含層および遺構面が検出されている。平安時代では木棺墓・溝・柱穴などが検出されている。木棺墓からはヘラ切り底の坏, 碗, 黒色土器B類などが出土している(第94図上段1~13)。木棺墓は全掘されておらず, 検出面近くでの出土品である。土師器坏は低く浅い形態のもので, 碗は深めの丸みのある形態であり, 黒色土器B類に似る。柱穴からは木棺墓出土品と同一形態のヘラ切り底の土師器坏・高台碗, 黒色土器A類が出土している(第94図中段14~19)。これらの遺構は古代から中世の遺物を包含する黒褐色土層直下で検出されている。古代の遺構検出面を覆う黒褐色土層からは, ヘラ切り底の土師器坏, やや丸みを残している坏(22:時期的にさかのぼるものである), 高台碗脚部片, 壺底部片がある(第94図下段20~25)。

土師器坏(第94図1~9, 14~16, 20~21)は低く浅い形態のもので, 碗は深めの丸みのある形態であり, 黒色土器B類に似る特徴をそれぞれもっている。坏は口縁部端部を外反させる点や体部外面調整のヘラ削りの多様などが特徴的である。坏は高さ1.6~2.3cm口縁部直径10.2から11.4cmに集中し, 十園遺跡や稗田原遺跡, 大園遺跡例とは一線を画する形態である。また, 出土品には須恵器が少なく, 土師器碗が多く, 黒色土器B類もあり, 島原半島における平安時代の土器組成の好例である。



第94図 筏遺跡出土土器(1/6)

十園遺跡12~14区SD01.



第95図 筏遺跡出土土師器坏

3) 十園遺跡の古代土器群

島原半島における一括性の高い古代土器群と十園遺跡12~14区SD01出土品との形態的側面を中心とした比較を行ってきた。SD01出土品には須恵器や須恵器の模倣品(土師器)もある。47区建物群中の柱抜き取り穴(P127)より出土したまとまりのある土器群(第29図)やC区SD04より出土した土器群(第47図), 35区自然河川上に並べられた土器群(第50図)などは一括性の高い一群と評価できる。ここではそれらの形態的な特徴を整理し, 串島遺跡で行われた編年案(註7)や大宰府史跡での整理(註8)などを参考にし, 島原半島で発掘された古代土器群の序列を考えてみたい。

35区自然河川祭祀関連の土器群に類似する土器群には, 埋納遺構である国見町石原遺跡(註9)8区Pit01出土の一括遺物がある。土師器高台坏身と蓋の組み合わせ1セットと須恵器小型の端頸壺1

点などが直径50cmほどの不正形小土坑に蓋と身を合わせた状態で出土している。同じ形態の土師器坏身は国見町五万長者遺跡(註10)でも小土坑から検出されている。

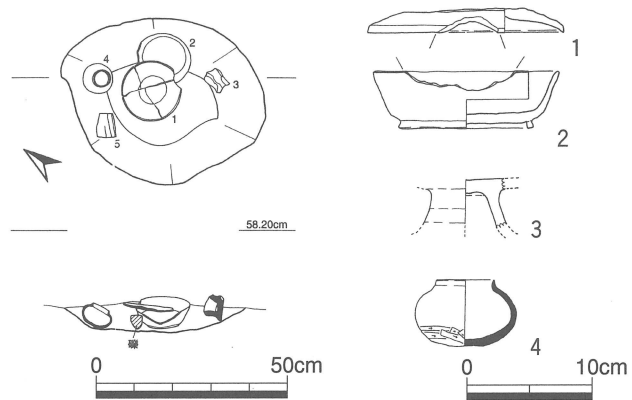
伏せた状態で直径50cmほどの不正形小土坑の覆土中に検出されている。有明町大野原遺跡(七反畑地区)(註11)においても同様の形態の土師器坏が廃棄土坑から大量の土器とともに検出されている。須恵器と土師器の組成はほぼ五分五分であり、土師器に回転を利用した調整痕や形成痕跡が確認できる。坏には底外面に「八」と刻書されたものを含み、8世紀代の土器群が主流を占めている。47区の建物群を構成する柱穴(P127)の柱抜き取り穴に入れ込まれた土器群(第29図)は大野原遺跡廃棄土坑と類似する特徴をもっている。十園遺跡のすぐ南に位置する小中野A遺跡1区SD01出土の土師器坏(第8図)も共通した特徴をもっている。出土している土師器坏の一つには「上」と読むことのできる刻書(註11)

が施されており、溝からの出土品であるが、比較のまとまった出土状態である。小中野A遺跡1区SD01出土品は十園遺跡や石原遺跡・五万長者遺跡例よりも若干大きく、口縁端部の反り具合も強く、やや古くなる形態を残しているのであろう。これらの土師器坏は須恵器の坏を模倣したもの(以下模倣坏と呼ぶ)であり、出土状態も埋納土坑や自然河川際に並べられるなどと祭祀色の強い性格を持っている。これらの模倣坏

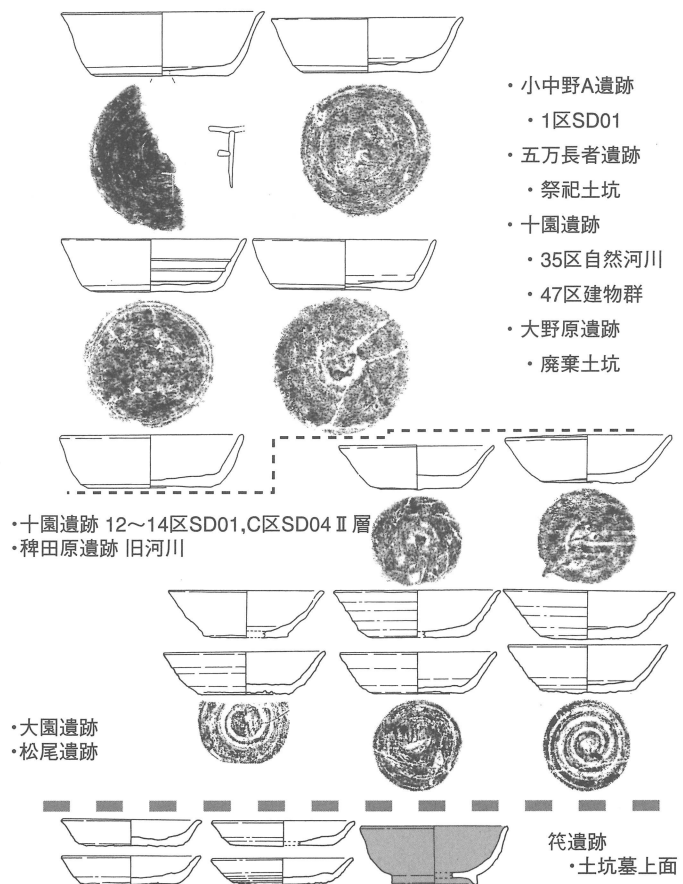
と十園遺跡12~14区SD01で多量に出土している十園坏A類との時期的な共存関係はどのようになっているのであろうか? 共伴する須恵器の形態的特徴や特徴的な遺物の組成などからそれを探っていくことにしたい。

12~14区SD01で出土している土器群と共通する特徴を持っているのは、C区SD04 II層から出土した土器群である。須恵器高台坏の脚部裾は外側へ踏ん張っており、12~14区SD01で出土している須恵器高台坏と共通する特徴をもつ。十園坏A類に類似する坏は先に法量分析で比較を行った稗田原遺跡や大園遺跡でみられる。それらと共伴する須恵器には8世紀後半代から9世紀初頭の特徴をもつ。また、いずれの遺跡でも黒色土器A類が少量ではあるが層位で出土している(註12)。

これらとは反対に多量の土器を出土しているにもかかわらず十園坏A類や黒色土器A類が見られ



第96図 石原遺跡 8区 Pit 出土土器(1/20・1/6)



第97図 島原半島での奈良・平安時代の土師器坏

ない遺構は、大野原遺跡（七反畑地区）で検出されている廃棄土坑である。この廃棄土坑の調査成果は模倣坏と十園坏 A 類との関係を把握する上で重要な問題を提起している。すなわち模倣坏に代わって十園坏 A 類が利用されるようになったと考えられるのではないだろうか？この地方における古代の坏利用の大きな流れの中で、8 世紀中ごろを境にして模倣坏から十園坏 A 類へ主体が変化していることを一つの仮説として設定しておく。その仮説を援用して作成したのが第97図の土師器坏の編年案である。申島遺跡で設定された編年案との対応は、模倣坏は申島遺跡須恵器坏分類のⅡB 2 類に対応する土師器坏（註13）に類似し、十園坏 A 類は申島遺跡須恵器坏分類のⅢB 類に対応する土師器坏片（註13）に類似する。年代は申島遺跡での編年案を踏襲するが、模倣坏と十園坏 A 類とが共存する期間があるのかどうか判断材料に欠ける。小中野 A 遺跡や大野原遺跡など模倣坏のみが出土する遺跡（8 世紀前半）、十園遺跡のように模倣坏と十園坏 A 類が出土する遺跡（8 世紀中頃）、大園遺跡や稗田原遺跡のように十園坏 A 類のみとなる遺跡（8 世紀後半～9 世紀初頭）となり、遺跡レベルでは3種の遺物組成となる。

第20図で十園遺跡において検出されている古代の遺構群を整理してまとめを締めくくりたい。奈良時代で最も古い人為的な行為は、36区における自然河川上での土師器坏の祭祀（8 世紀前半代）である。それと並行する時期かその直後に47区で検出された建物群と直線的に延びる12～14区の溝が構築される。その後、建物が廃棄され、直線的に構築された溝（12～14区 SD01）が大量の土器とともに埋没する9 世紀初頭まで確認されるのである。（竹中）

註

- 1 報告書作成の整理作業中にカウントした値である。土師器甕については、胴部片がコンテナ一箱分出土しているが、口縁部片のみをカウントしている。供膳具の類は口縁部片・胴部片・低部片を、貯蔵具の須恵器甕・壺は口縁部片・胴部片・低部片を、煮沸具の竈や甑は破片をそれぞれカウントし合計したもの。
- 2 遺物組成や数量的把握については、変化の量を数字で客観的に示す手段として用いられる方法である。時期的な数量や比率の変化を、基礎的なデータをもとに整理していくことが好ましい。今回は時期的な変化にまで言及できなかったが、資料の蓄積を待って、今回の成果を検討していかねばならないであろう。
- 3 川口洋平2000「歴史時代の遺物について」『稗田原遺跡Ⅳ』長崎県文化財報告書第157集 長崎県教育委員会
- 4 ①川口洋平2000『稗田原遺跡Ⅳ』長崎県文化財報告書第157集 長崎県教育委員会
②川口洋平1999『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県文化財報告書第152集 長崎県教育委員会
- 5 安楽勉1991『守山地区県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告』吾妻町の文化財第12集 長崎県吾妻町教育委員会
- 6 寺田・川口1994「筏遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ』長崎県文化財報告書第114集長崎県教育委員会
- 7 宮崎貴夫1980『申島遺跡』長崎県文化財報告書第51集 長崎県教育委員会
- 8 山本信夫「北部九州の土器」・横田賢次郎「大宰府の土器」『日本土器事典』（1996雄山閣出版）や中島恒次郎氏の整理（「年代推定のための手続き」九州時研究会平成12年7月22日発表資料）などにまとめられている。
- 9 竹中・辻田2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第3集 長崎県国見町教育委員会
- 10 川道寛1997「五万長者遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ』長崎県文化財調査報告書第133集 長崎県教育委員会
- 11 諫見富士郎1993『概要報告書 大野原七反畑遺跡』有明町文化財報告書第10集 長崎県有明町教育委員会
- 12 ここでの黒色土器の扱いは、まったく出土の見られない大野原遺跡廃棄土坑との対比のためのものである。
- 13 模倣坏：前掲註7本文79Fig.62-3 十園坏 A 類：前掲註7本文60Fig.45-7

図版出典

第88図：前掲註4①第15・16図より加筆掲載

第90図：前傾註4②第7図より抜粋加筆掲載

第91・93図：前掲註5第10・11図より加筆掲載

第94図：前傾註6第29・30図より抜粋加筆掲載

第96図：前掲註9第44図より加筆掲載